



亀井少楽「蘭（画稿）部分」

季
能古博物館だより
誌

少楽によせて

安倍光正

天地一指

私が少楽の書を初めて見たのは、中津市の医師村上健一居においてである。それは昭和三十年前後のこと、座敷の長押にかかる扁額、「天地一指」であった。その由来は、健一の祖父杉全又玄が



妻は春海の五女迷子、三男和三が村上家十代を継ぐ。四男巧児は、井筒屋社長、西日本鉄道社長となり、後貴族院議員に勅選された。健一は和三の長男である。

人の絆

少楽の一書をたよ

りに、中津、秋月、福岡との絆の糸をたぐってみたい。田長の母について次の事が判明したのは、秋月の曹洞禅寺・長生寺で発掘された石刻墓誌による。それには、

「君名千瀬、筑前國朝倉郡弥永村大己

典医村上春海の養子となり、名を田長と改めた。彼ははじめ医を業としたが、間もなく県立大分中学（現在の上野ヶ丘高校）の初代校長兼大分師範学校長、ついで玖珠郡長を勤めたが、晩年はまた医業にかえり郷党人のためにつくした。

貴神社大宮司松木俊章妹也。来嫁秋月藩杉全健甫為継室、後寓豊前國中津村上田長家、享年八十八老嫗無病没、田長君之男也。干時明治卅二年八月十五日午後四時十分。田長謹記」と刻られていた。すなわち杉全健

能古博物館だより

甫は、松木俊章の義弟であり、共に原古處の門下生であった。

原古處は十八にして亀井南冥の門に入り、後秋月藩巽稽古館の教授となる。その俊秀として吉田平陽らと共に杉全健甫の名もあげられている。古處は亀井南冥の下に於て少梨の父昭陽とともに学び、亀井家とは親類づきあいであったという。南冥愛用の銅印「東西南北人」が、南冥没後昭陽から古處に贈られたことによっても、その親交を知ることができよう。昭陽と古處には、それぞれ少梨、采蘋の閨秀があった。中津・村上家に少梨の扁額「天地一指」を見ることも、絆の糸をたどればこのようなことになるうか。

健一先生死去後、長男玄児君に乞い戸柵にあった古墨一つを記念にいただいた。その古墨は二つに割れ、一片の表に「龍」の金文字が残っていた。箱蓋の裏に消え残る文字を判読すると、

「古墨(管惟一氏製墨、量目卅目)大江雲澤君所藏、君余姉婿也。明治卅二年依病長逝、余請墓其嗣子億司氏得之、墨色如漆香氣滿堂……明治卅二年一月 田翁手記」

とあった。大江雲澤(範吉)の妻一は春海の三女、田長の妻迷子はその妹である。百年をこえるこの古墨が、雲澤や田長に愛され、今日余の手にあることも、思えば不思議なえにしである。

杜甫草堂

もう一つ少梨の思い出は、九大元教授江嶋寿雄先生らと中国の四川省へ旅した時のことである。私たちは成都の浣花溪に杜甫草堂を尋ね、そこで少梨の艶詩なるものを聞いた。同行の江嶋先生は竹林の小径を歩きながら、少陵草堂の前で、

舍南舎北 皆な春の水

但だ見る 群鷗の日々に来るを
花径曾て 客に縁りて掃わず
蓬門 今始めて君が為に開く

を誦してきましたよと言われる。そして、

「少梨、知っていますか」

「ええ、亀井少梨ですわね、昭陽の娘の」

「彼女の艶詩は、これをまねたとも言われていますね」

「どんな詩ですか」

「九州第一、梅今夜為君開
欲知花眞意、三更踏月来

と言うんですが、蓬門今始めて君が為に開く、ここが杜甫をまねたと

言われていますね」

「さっきの蓬門は立派でしたわね。ちゃんと蓬門の扁額をかかれています」

「あれは後で作ったもので、昔は粗末な柴垣の門だったでしょう」

そんなことを話しながら、私たちは、一行におくれまいと竹林の小径を急いだ。

昭和三十二年中津に村上を冠して、村上記念病院が開業、その後福岡西区にその分院華林堂村上記念病院が

建てられた。華林堂は村上家六代玄秀の号をとったものと言う。

庄野先生の『閨秀 亀井少梨伝』を一讀し、少梨の想い出を記し、以て祝詞とする。

(註) Ⅱ「天地一指」

天地も一本の指である。差別相を超越して見れば、天地間の萬物は凡て齊一なものであるという意。出典は「莊子、齊物論」にいう。

天地間の物みな一つ。物と物の違いを越えて見ると物みなひとつである。

亀井少梨伝余録

庄野寿人

・夫君雷首と洋薬 ・雷首先生は赤ひげ先生
・少梨塾の女子書生と成績簿 ・亀井家大変

夫君雷首のこと

亀井家の医業を継ぐため少梨と結婚、さらに藩許を得て亀井家の家族となった三苦源吾は号を雷首山人、略して雷首また山人として亀井家記録に出る。本稿では雷首を用いる。

雷首の医学修業は、南冥直伝によると思うが、南冥の師「永富独嘯庵」が再三長崎に遊学して蘭方医術を志していた影響を多分に受けていたと思う。本稿で紹介しようと思う雷首

の洋薬購入は、その用法と共に医療進歩を得ていたと推察される。

なおこの記録は雷首自筆である。覚(価格・薬品名・数量を記す)

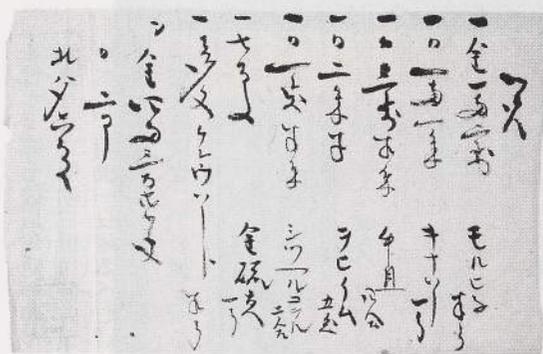
一金一両二歩 モルヒネ

一〇一両一朱 キナソー

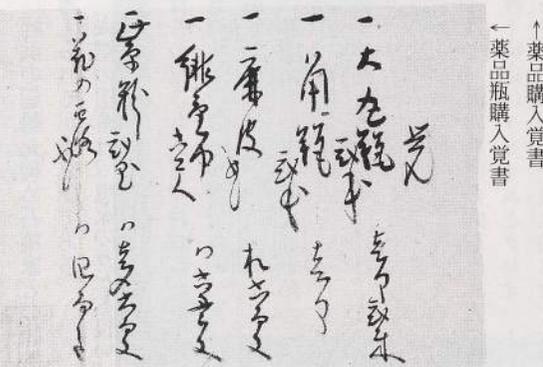
一〇三歩半朱 牛胆

一〇二朱半 ヲヒイム

四合



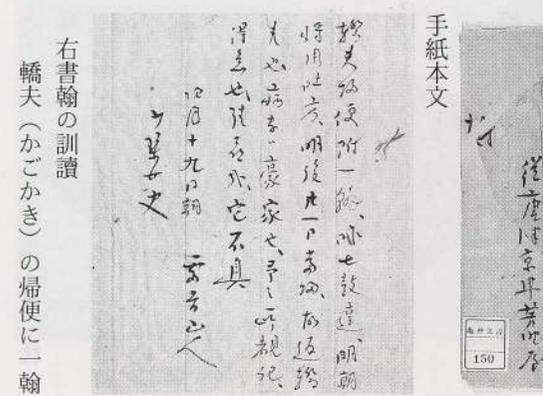
五匙
一〇一步半朱 シッフフルコラル
二合
一〇七百文 金硫黄 一 勺
一〇七百文 クレウソート 半 勺
金四両三百五文
江戸期の貨幣制は、一両を四歩(分)、一歩は四朱とする四進法で、この呼稱貨は金建て、一貫は銅で、金一両は銅(銭文)貨四貫文(一文銭四千枚)を等価換算する。この計算で、雷首購入薬について説明を加える。



なお、参考までに当時の金一両をいまの一〇万円に仮定する。まず、最初の「モルヒネ」については、説明するまでもないので省略。価格は、半勺(勺は一合の十分の一。〇、〇一八リットル)〇、〇〇九リットルという少量で価格一五万円。さすがに高価薬である。「キナソー」はキニーネのことでマラリアの予防薬で知られるが解熱剤として即効を示す。一勺(〇、一八リットル)。価格一〇六、二五〇円、これも高価薬とされる。「牛胆」は、牛胆のこと。熊胆の代用薬で、牛の肝(肝臓)を乾燥し

↑薬品購入覚書
←薬品瓶購入覚書

粉剤、かつ煎汁薬とする。精氣増進と健胃剤、著効ありとされた。四合(〇、六四リットル) 価格七八、一五五円。
「ヲヒウム」は(Opium)阿片剤で、麻薬的な鎮痛、即効性下痢止め。五匙。価格一二、五〇〇円
「シッフフルコラル」は、酒精、即ちアルコールのこと。傷口の消毒に使う。二合(〇、三二リットル)。価格二八、二五五円。
「金硫黄」硫黄製剤、外用薬で傷口の乾燥と收斂(しゅうれん)傷口を収束させる)に使う。一勺(〇、〇一八リットル) 価格一七、五〇〇円
「クレウソート」現代も常用されるクレオソート剤(セイロガン)である。即効性下痢止め。半勺(〇、〇〇九リットル)。価格二五、〇〇〇円
(合計) 金四一七、五〇〇円
なお、雷首は硝子薬用瓶なども使用しており、これも記録でわかる。さて、こうした洋薬の入手であるが、江戸期の鎖国も幕末に近くなると、人の国外往来は依然厳しさがあがるが、物資については少しゆるみが見え始める。とくに雷首を主治医とした平戸藩生月島の西海捕鯨王と称



される益富家による協力なども考えられるが、これに関する記録はない。しかし、こうした洋薬の適確な使用は、治療効果を著しくして雷首の名声を高める。このため遠地からの診療依頼も多くなる。この一例を次に紹介する。
(包紙の表) 少栗女史 雷首山人 平安
封
(包紙の裏) としめ
從唐津京町芳野屋

右書翰の訓讀
幡夫(かごかき)の帰便に一輪

を付す。昨七鼓(午後一時)に到着せり。明朝、將に吐方を用ゆべし。明後一日帰るべし。故に轎夫を返す也。

病家は豪家也。予の視る所を記す。

意を得たり。喜ぶべき哉。

四月十九日朝 雷首山人

少栗女史

本信は包紙にある通り、唐津京町芳野屋から発したものだ。往診の往復に轎乗用で要請されたことがわかる。雷首は、今宿を四月十八日出発、同日午後一時に唐津芳野屋着。すぐ患者診察の結果、とても日帰りで治療できるものでないと判断し、ために三泊四日を要するとして明後二十一日に帰宅する予定を、今宿の妻に知らせたもの。

幸いに患家は豪商で薬価の心配は無用。

次の「意を得たり。喜ぶべし」云々は、雷首と少栗に相通するものとしておこう。

雷首は、この重病人を美事に全快させ、これによって同家の信頼は次代の雋永まで続いた。

芳野屋(吉野屋)は、石橋姓で唐津藩御用の船問屋として近代まで続いている。

姪浜の廻船元締め石橋家との縁も考えられるが未確認である。

夫君の雷首は、患家のウケも良い。本人の人柄によるものであろうが、育ちの良さもあり、おおらかで人好きのするところが多分にあつた、と思われる。

診療についても研究心と熱心さがあり、難症や重病者をいとわず、高価な洋薬も惜しまず使った。この中で、クレオソートなどは、当時の人には大いに効験を示した。その一例として、近郊前原の商家十六人の急性下痢症にヨヒイムとクレオソートを併用し即効、全員全治させて大評判になった。

ヨヒイムの鎮痛作用と即効性下痢止め、これにクレオソートによる殺菌整腸効果は現代でも適切な処方治療にされるようである。

この症例は、おそらく単純な食物中毒であつたと推定されるが、当時は疫痢(小児に多い急性伝染病)、また赤痢など流行性疾患による高い死亡率は、今日では考えられないほどであつた。現代は科学的な検査によって病因診断され適切な治療がされるが、昔は単に下痢を催しただけで強い恐怖感を伴つた。それだけに雷首が一家十六人を全快させた話

は、世間を驚かせ賛嘆を呼んだことになる。

金持ちには薬代を相当にいたたく。貧しい人たちに差別のない診療と高価薬も惜しまず与える。

酒好きで、武士身分に出世しながら腰の刀を忘れることがある。元々の生れ育ちが農家のせいか。これなど庶民に好まれる話題になる。

まさに「赤ひげ先生」的な雷首像がつくられ好感を持たれる。

少栗の文人画作品に、多くの雷首賛が加わるのも、兩人に対する世間の篤い人気にはかならないのである。

今宿亀井塾も盛んであつた。

嘉永元(一八四八)年、雷首は甘泉楼を新築、このため旧居の好音亭を少し横に移築、浴室を増築する。

また、人參畑(葉草園のこと)に新井を掘る。これらの総工費は金八十両。これで内書生を甘泉に移し、好音は書室にする。以上は、今宿亀井家年鑑記事である。

嘉永五(一八五二)年八月廿三日、雷首死去。享年六十四歳。時に少栗は五十五歳、結婚三十七年であつた。

少栗は夫の死亡通知「同姓源吾事兼而病氣に候処養生不相叶……」と、自分で三十九枚を書いた下書き一枚

と、宛先三十九人の手控えと一緒に残している。

後嗣の雋永は廿歳、医学は父雷首の仕込みであるが、その以前の経書(論語など中国の教養書)は、少栗が父昭陽から自分がされた教程通り六歳から論語、十歳で書経まですべて修得させ、十一歳で中国医学書の『傷寒論』に進ませるが、これからは夫の雷首が担当、すでに廿歳の好青年に成長、立派に父親雷首の代診先生を果していた。

父の死後、少栗の勧めで江戸、長崎に医学修行に出る。

少栗は、晩年まで雋永の協力を得て家塾をつづけるが、後に女子書生多数を教えたことが資料でわかる。

当時、すでに幼童の寺子屋教育に男女共学が見られるが、漢学塾に女子参加は少なかった。この資料は現在、福岡市民図書館の所蔵『三宅長春軒文庫』に亀井塾点取表一巻としてある。内容は男子書生十三名が四回、女子書生七名に一回、いまの学期試験を男女別に行つた各人の成績記録である。この中に丙辰年号が見られ、これによって前年の安政二年から三年にわたる少栗五十八―九歳時となる。女子書生の試験は、安政三年秋九月廿九日に『論語卷之一、

能古博物館だより

二の取説」として、七名全員に実施され、その成績を白と黒丸(○●)で採点を示し、白丸多数順で第一位を甲、以下第二―四位を乙、丙、丁として各一名、第五位は戊で二名、第六位は己とし一名、これで全七名各人の採点と順位が決められている。現代にも通用する公正な学業採点である。

この女子書生の名前は、武藤久子、石橋熊子、篠原善子、武藤作子、東郷忠子、脇坂橋子、平野正子である。少稜展期間中に「この名前は、うちの曾祖母さん。母がよくお祖母さんが論語を言葉にされ、感心させられた、と話していました。やっぱり本当の勉強をされていたんですね。」



亀井塾点取表 (部分1)

郷土の歴史資料展は、有意義に満ちている。こうした反響があると楽しい。今宿亀井塾は、現代の大学に相当する教科内容である。本家塾は、大学院にされる。これらも、今回の少稜展による副次的観察の効果である。それにしても今宿亀井

人には、大して苦になる道の前ではないにしても少女のこと、きつと誘い合せての通学か、或いは少稜先生に行儀見習いを兼ねた住込みも考えられるのである。男子書生の十三名は、安政二―三年まで計四回の採点実施が記録されている。これにも姪浜の

の有名に霞んだ感がある。これらも世に出すこと、とくに雋永は近世から明治近代に移行する存在として考えたい。さて、次は「亀井家大変」と、される事件を述べておこう。亀井家は本家、(一)太宰府亀井家「昭陽次弟の雲来が医業を営む」(二)姪浜亀井家「曾祖父聴因が医業を開く。後に昭陽末弟大年が医を営む。また甥大生医業を始む」(四)今宿亀井家「雷首、少稜による亀井家医業を継ぐ」の四家となっている。今宿亀井家資料に、少稜筆で包紙表に

「父様 大生と晟三郎を御責被成候書也 友 一」 とし、書付数枚が中にある。この書付は、すべて昭陽筆で自分の甥になる大生と晟三郎の不行届き、或は不行跡を叱責したもので、中の一紙には晟三郎を亀井家から追放というものである。大生、晟三郎の兄弟は、昭陽の末弟(南冥の三男)大年が文化九年に三十九歳で病死した遺児である。大年は、医術を身につけて祖父聴因の旧居に開業するが、文学、書法にもすぐれ、いわゆる五亀にかぞえられて著述も若干ある。ただ性狷介(自分の意志をまげないで)で、貴顕(身分が高く、名声あらわれている人)に接するを好まなかった。自らも生涯に袴を着けなかったという。おそらく刀も指さなかったであろう。大年は、五亀筆頭の父南冥に先立つこと二年の若死にであった。時に遺子の大生は十三歳、その弟晟三郎十歳である。やがて大生は、祖父南冥に早く医術を学んで博多に開業した平島生民に医業を学ぶ。生民は非凡で、患者に接するに篤く、諸症すべて貴重として己の経験、研究にした。昭陽は生民に生涯の信頼をおき、家族共に主治医にした。大生は二十歳、父と同じく曾祖父以来の旧居に開業するが、伯父昭陽の記録にあまり出ない。昭陽の「空石日記」の文政四年(一八一二)元旦「晟也来賀年十八、是大年中庸考之歳也」とされるが、昭陽は元旦の祝賀に来た晟三郎に「お前の年には父大年は「中庸考」とした一書を作した(著述をいう)のだよと、弟の回顧を語って甥を上げます心づかいを見せている。翌五年元旦にも「晟也来賀年十九」とする。

13号 書生(塾に起居する)であろうか。姪浜から今宿亀井塾までは直線で五・五軒。これに小高い峠がある。昔の

「母が見たら喜んでしょうが亡くなりました」と語られた。この方は、昔から対岸の姪浜にお住まいである。こうした女子学生は、通学か、内宿でもあらためて認識が加わったようである。雷首と雋永、この業績も立派であるが、従来とかく南冥、昭陽、少稜

家の多数資料の伝世保存は有難い。今回の当館企画に同家資料の公開協賛をいただいたことで、地元の今宿でもあらためて認識が加わったようである。雷首と雋永、この業績も立派であるが、従来とかく南冥、昭陽、少稜

の有名に霞んだ感がある。これらも世に出すこと、とくに雋永は近世から明治近代に移行する存在として考えたい。さて、次は「亀井家大変」と、される事件を述べておこう。亀井家は本家、(一)太宰府亀井家「昭陽次弟の雲来が医業を営む」(二)姪浜亀井家「曾祖父聴因が医業を開く。後に昭陽末弟大年が医を営む。また甥大生医業を始む」(四)今宿亀井家「雷首、少稜による亀井家医業を継ぐ」の四家となっている。今宿亀井家資料に、少稜筆で包紙表に

しかし、昭陽は同年十月、この甥に次の一書を雷首をして申し渡すことになる。

拙宅聴講之帰路 晟三郎
 御禁制に背たる事 此節 此
 れを聞き 恐れ入り候
 拙者家内に 右体之者 此
 有るを 其の墟 差し捨く儀
 これ無く、困って
 亀井の氏と刀とは 以後
 相い許さず候 屹度 心底改
 まる迄は 拙宅往来 禁止致
 し候
 十月廿日

右は、甥の晟三郎が亀井塾からの帰途、藩の取締りに触れる行動があったことを聞かされた。亀井家の身内に其のような者があったことを許認することはできない。よって亀井の姓を名乗ること、また帯刀も認めないことにする。改心が得られるまで亀井家に入りは厳禁という昭陽決意の処断である。

姓氏(苗字ともいう)帯刀の禁止は、武士身分の剥奪になる。武士の家は、相続当主を中心に直系の父、祖父、これに妻子は武士家族、また当主の兄弟も他家に縁付き(養

子、嫁入りなど)しない限り、家内判として当主責任の家族に見做され、士族身分を保証される。その多くは部屋住みとして無妻、未婚であるが、

男子は苗字帯刀を許される。それらが同居を離れ、別世帯をする男子(晟三郎に相当する)の帯刀は、当人に強い執着があると思われるが、これにも本家当主の家内判による保障は認められないのである。晟三郎が藩禁に違背したという行動の詳細は記録に見られないが、幸いに藩役人による追及でなく、亀井家に好意を持つ者の注意と思われる。

それにしても、昭陽の決断にも苦悩が大きかったと推察される。

甥の晟三郎に亀井姓と帯刀、つまり武士身分の停止を申し渡したのである。

この年の七月、昭陽晩年の愛児脩三郎を急症によって亡くしている。しかし、これが晟三郎に直接かかわったことではないが、昭陽の心情に考えさせられるものがある。以後、大生と晟三郎に関する記録は見られない。

前年二月、昭陽家には雷首夫妻が結婚四年目に同居家族となっている。昭陽は、これによって気のゆるみが出たものか、同年九月発病、翌五年

三月まで療養、ようやく健康回復後に修三郎の死去である。

この直後に、大生と晟三郎叱責事件となる。

少栗の少女期詩作

(自筆本)

従来、少栗詩は、彼女が結婚前年の十八歳にした「窈窕稿乙亥」を初期詩作集としてきた。しかし、彼女の作詩が知られるのは、十二歳の文化六年五月に日田の広瀬淡窓が六ぶりに亀井師家を訪問した際、贈詩したことが淡窓記録にされながら、少栗自筆本「窈窕稿」に、その該当詩は見られなかった。

今回の少栗展に際し、今宿亀井家資料に表題がなく、ただ「詩集」とした一冊本があり、これに「送廣簾卿」と題した七言絶句がある。廣簾卿は、廣瀬淡窓のこと。これに続いて「秋候、金鳳山寺に遊ぶに陪長詩を得る」と題した詩。

次に、「神村玄條、平戸に帰るを送る」と題した詩。これは本誌第六号に、また今回の少栗展記念出版にした「閨秀亀井少栗伝」の74頁「少栗年賦」十一歳記事に少栗が父昭陽

と東郊須恵村に遊行するに加わった平戸藩士神村玄條、途中の勝景を賞し少栗も共に分韻詩を作した人物である。おそらく、神村玄條が翌年、即ち少栗十二歳に帰藩、その送別に

した詩と思われる。

以上の三詩を詩集(自筆本)から抄出し、写真にして次頁に掲載。

また、詩と書を少栗十八歳にした「窈窕稿」も同頁で比較に供する。

十二歳と十八歳、成長と諸事上達の早い年頃である。窈窕稿の美事な出来に比べて、詩も書も、年令に相応する稚拙が見られるが、なお少栗の天分と本人の並々ならぬ修業がうかがえる。

この詩集は、半紙版三十二紙(表紙を除く)末尾に野紙一枚を添え全紙二ツ折帖、内容詩是一片紙に一詩(写真参照)で太字である。全詩七言絶の六十四詩、窈窕稿に複合する詩はないので、少栗十二歳からの最初期詩作と思われる。用字は、亀井家の古文辞をよく駆使している。

右に父昭陽の朱訂は見られない。或いはその後の清書であらうか。

最尾の一紙に、少栗筆で友之少栗、翠雲、簾窓主人、窈窕郎と書す。

これで、少栗少女期の詩作と書うかがうことができる。

送廣蕪郷

白馬駁々不可留相逢
相別轉綢繆淮南流水
行人遠筑北寒雲迫自
愁

廣蕪郷を送る

白馬駁々留むべからず
逢い別れてまといを転ず
淮南の流水、行人遠し
筑北の寒雲、自愁、廻る

駁々 早く進むさま
綢繆 まつわる
淮南 大河をいう

陪 秋侯遊金鳳山

寺得長字

曇花落處滿林香賜宴
禪房白日長紫酒青茶
談自妙諸天縹渺對空

秋侯に陪し金鳳山寺に
遊び長字を得る

秋侯 秋月藩主
長字 のこと
作詩をいう

花曇落つるところ満林香る
宴を禪房に賜い白日長し
紫酒青茶 談自づから妙なり
諸天縹渺、空王に對す

縹渺 是るかに広い
空王 仏の尊称

王

送神村玄條歸平門

肥山筑海白雲開萬里
風濤送客回別酒稍耐
舟解纜繁絃急管不堪

神村玄條平門に帰るを送る

肥山、筑海、白雲開く
萬里風濤送客回える
別酒稍耐なるに、舟纜を解く
繁絃、急管、哀しみに堪えず

平門 平戸
肥山 肥前の山々
筑海 筑紫の海
繁絃急管 奏楽をい

哀

神村玄條は亀井昭陽に約二年（少栗十一—三歳）

学ぶ。

昭陽その才覚を愛して常に詩行を共にした。

少栗詩作「窈窕稿」自筆本

少栗の書は、父昭陽に見習うところが多いようである。例えば窈窕稿の書体は、昭陽の「東遊賦」に接近する。この東遊賦は、昭陽が秋月八代藩主の長舒公によって父南冥の名著「論語語由」が、稿本のままであるのを惜しんで公刊にする。このため江戸に於て版刻と校正を昭陽に担当させるとし、参勤行列に加えられた。これで江戸滞在中も経験、これは昭陽生涯に忘れ難い感銘とな

江春曉望

古寺疎鐘渡水灣紫烟偏鎖夕陽山春江如
練流光遠一汀蒲帆帶月還

又

雲岫山腰夕日紅梨花如雪春長風惜春詩
酒何清夢都在常思百轉中

算春送家第騎馬遊雷山

仙即何去滿山霞相送河梁日已斜
風吹欲盡芳郊桃李自飛花

園圃小景

芙蓉花簇水盈灣日暮玄條抱子還
風天樂動坐忘骸骨在人間

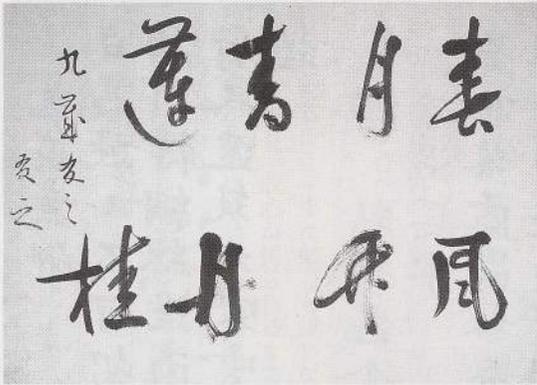
。そのため昭陽は、秋月侯の恩徳に始まり旅程と滞府の見聞などを調律的な文体に纏めて清書、記念版刻とした。これが現代に残る「東遊賦」一巻であるが、少栗の「窈窕稿」は、どちらが代って書いても判別し難いとされる。

上掲の少栗十二歳詩集に比べ詩作、書法に抜群の上達というほかはない。

「窈窕稿」については本誌第7号に詳細、ご参照ください。

亀井少栞の書画作品

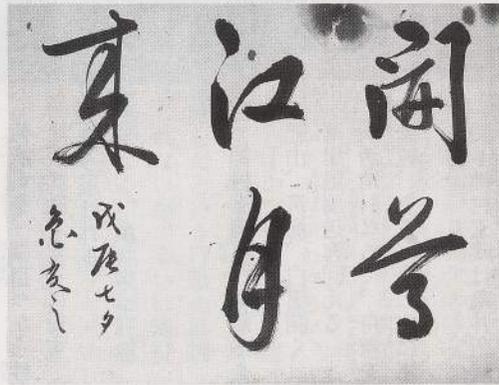
少栞の少女期習字には、父昭陽の指導が窺えるが、画作については専ら少栞独自の努力と認識される。絵画独学には芥子園画伝（清朝初期の刊行書）がいわれるが少栞蔵書の記録（実物は現存しない）があるので少栞が目を通したことは否めない。しかし少栞作品に見る限り、ほとんど少栞独自の画法で他からの教授はなかったとされる。当時の文人画に多い四君子（梅、蘭、竹、菊）山水というきまり型の画材を超えて、広い対象に挑んだことが今宿亀井家に伝世する画稿で判断される。



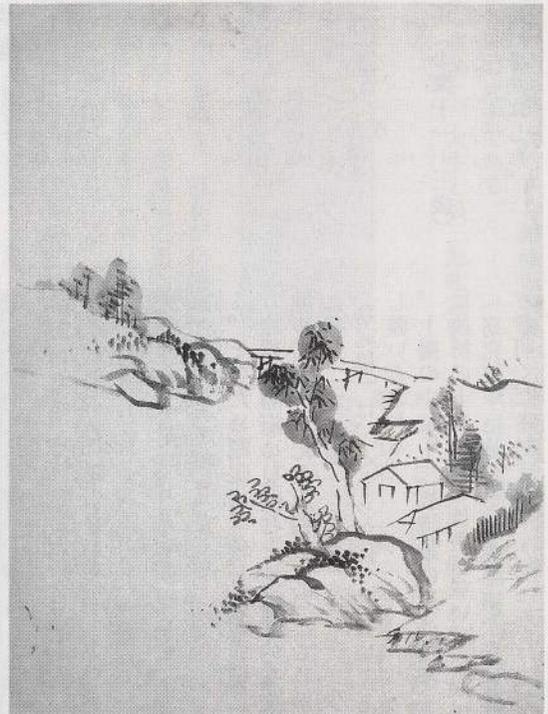
亀井少栞（習字）9才



亀井少栞（習字）13歳



亀井少栞（習字）11歳



亀井少栞 風景画（習作）

(左)

掌中 日を射ける黄金の蕊
頭上 風薫り酒巾を濺ぐ



(右)

梅花、美事に当に軒に発くべし
いざ寒驢を使わず雪を衝いて 尋ねん

少采自題梅花菊之図

(二曲屏風)



亀井少采「葡萄図」画稿



亀井少采「野菊図」



亀井少采「大黒天図自題画」



亀井少采「風景図」

能古博物館だより

◎六月二十七日吟行・安元 溢社中

望郷の一碑に濃紫陽花

安元しづか

野胡桃の青さ育てし島の雨

秋吉 節女

水無月の乳房ふくまず画家の像

進藤 登代

閑秀の絶筆の絵の梅雨じめり

安川 逸子

夏蝶や文豪の故居古るまゝに

二田川 妙

百年を経し手ひねりの陶涼し

宮田 良子

万緑の海にせり出す能古島

原田多恵子

紫陽花の海の色して島山に

徳久 美鈴

夏蝶や「火宅の人」の庭に飛ぶ

新飼 陽子

需学書の墨跡の徴ほのかなる

牟田 節子

野ぐるみの青きを拾い能古に來し

吉富 歌子

山梔子の匂ふ島山 寺一つ

宮内 暎子

島長の石棺埋れ 五月闇

渡辺 和子

野胡桃の青くて鹿の絶えし島

兼田多江子

冠の海見おろす丘の浜木綿

吉本嘉代子

◎御寄付金品の明細(平成四年四月)

—六月末—

(寄付・協賛金)

○五万円 石橋観一・早船正夫様

○拾万円 大牟田運送(株)南誠次郎様

○参万円 協通配送(株)今林昇様

○壹万円 安陪光正様(南区)

○参万円 南誠次郎様(春日市)

○壹万円 三島庄一様(久留米市)

○二、六九〇円石川文之様(中央区)

○五千元 藤由子様(杷木町)

○六千元 能古中・小学校

○壹万円 森光英子様(久留米市)

(美術・資料等)

○絵画(油彩) 額装・田岡 秀遺作



スペインの古都

安陪光正(福岡)②・浄満寺(福岡)②

沖 双葉(福岡)②・花田加代子(福岡)②

七熊澄子(太宰府)②・木原敬吉(飯塚)②

庄野直彦(直方)②・大久保津智夫(飯塚)②

江崎正直(大牟田)②・緒方益男(佐賀)②

中山重夫(唐津)・七熊太郎(佐世保)②

七熊 正(佐世保)②・伊藤 茂(倉屋市)②

小堀定泰(滋賀)②・西村俊隆(東京)②

白水義晴(東京)②・多々羅幸男(千葉)②

会員ご氏名に②は会費ご継続をいた

いたしるしです。() は多年分のま

とめ

お払込み、() は増口数ご負担を

示します。

【協賛会会員(法人)】

流通 共 済 (株)花田積夫(福岡)

タイム社印刷 (株)安部栄一(福岡)

(株)笠 組 笠 忠夫(福岡)

博多ちくわ(株)魚嘉・松尾嘉助(福岡)

権藤税理事務所(株)権藤成文(福岡)

協通配送 (株)今林 昇(福岡)

大牟田運送 (株)南誠次郎(福岡)

山谷運送 (有)山谷悦也(東京)

(株)三島設計事務所・三島庄一(福岡)

西尾トラック運送(株)西尾秀明(福岡)

日 西 物 機 工 (株)原 重則(福岡)

東洋特殊流工 (株)西尾敏明(福岡)

橋 詰 工 務 店・橋詰和元(福岡)

愛宕建設工業 (株)野村六郎(福岡)

九州三菱ふそう自販(株)宮崎慶一(福岡)

(有)愛光ビルサービス・野田和禮(福岡)

(有)クリーン開発・野田和禮(福岡)

延 寿 産 業 (有)池田邦夫(福岡)

※新規の御加入(先号以後、一月三十一

日まで)は、右の地区ごとに記載いた

認下さい。ありがとうございました。

友の会 年間3千円

(館の活動、館誌購読と催事企画に参加)

自然と文化の小天地創造

能古博物館の会

協賛会(個人) 年間1万円

〃 (法人) 年間3万円

〔館維持、資料収集、施設整備等の資〕

〔金援助を受ける〕

納入方法 郵便振替 福岡3160970

財団法人 能古博物館

右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。

【お願い】ご送金は振替用紙(送料加入者負担)をご利用下さい。用紙はご連絡次第お送りします。

当博物館の活動、また絵画・古文書資料など当館に皆様のご支援をお寄せ下さい。

図書出版

『閑秀 亀井少梨伝』

詩、書、画の作品で仙厓の次に多いのが同時代の亀井少梨。しかも少梨には艶麗な漢詩の恋歌まである。これが同女の作か否か。これに始まる探究の書である。

B5版・表紙布装美本

限定 一、〇〇〇部

図録全カラー50頁・本文94頁

直売頒価 三、〇〇〇円

(送料 三二〇円)

○絵画(素描に水彩)額装・右同遺作
寄付者・東京都町田市・田岡貞子様



樹の下で憩う老人たち

右は、西区愛宕・結城進御夫妻のお世話による。

○『采薪集』天保二年亀井陽洲筆題を首文に各地四十七士の詩作自書を集成、和装本(帙入)にした珍しい詩作集。詳細研究を本誌に発表いたします。

寄付者・西区愛宕・結城 進氏
○亀井南冥書「清音」二字を彫刻した板額
寄付者・西区姪浜「南川病院」

「江戸後期筑前閨秀展」を終えて

「江戸後期筑前閨秀展」亀井少梁と二川玉篠」この企画展に当り、まずポスター、表題にした閨秀(学園、芸術に特にすぐれた女性をいう)の

語がむつかしいと指摘が多く、これは反省を痛感した。会期3ヵ月幸いに雨天が少なく七千名を超える入館者を迎えることができた。



亀井南冥書彫刻板額
タテ 29.7 ヨコ 46.3

理事長 南川勝三氏
右は、「亀井少梁・二川玉篠」企画展にご協賛を含みます。
御寄付絵画等写真紹介。

○昭陽書簡タテ16・5ヨコ・64・5
「瑞雲上人宛豆太郎とし内容には少梁結婚となり候筈にて(中略)婿は井原三吾齋吾と申す医生にて」とあり、日付の霜月廿二日は文化十三年十一月とわかる。(額装)
寄付者・葦書房・宮徹男氏
前掲に写真紹介

本誌が長く連載した「閨秀 亀井少梁伝」は、企画展記念に同題で少梁の生涯を書き上げ別冊本とした。よって次号から「亀井昭陽伝」掲載を始める。昭陽伝には父南冥と少梁がかなり登場するが、従来の連載と今回刊行本にも重複しない記事にする。それほどに少梁は亀井家を語る中で大きく存在する。従来、とかく女性を沈めた感がある。妻の「いち」これも昭陽と亀井塾に大きな支えであり、娘少梁との手紙などで立派な教養がうかがえ、さすがと思われる。亀井家を世に出したのは、南冥の父「聴因」である。一介の田舎医者で終ったが、その開明思想によって徂徠学を認識、南冥と昭陽に指針、亀井学を成したことになる。不幸にして体制学を自認する朱子学派の策謀にされるが、和歌山藩、出羽庄内、大和郡山の各藩では寛政異学禁の余波も受けず徂徠学を通じ切った。残念ながら福岡藩には一貫性がなく明治維新に劣敗を招くことになる。南冥、とくに昭陽が弾圧や大火罹災にも屈せず家学を守り抜き、広瀬淡窓、原古処、白石照山を介し近代への人材を輩出した裏方は、博多町人、郡部富農の指導者たち、これに昭陽妻の実家に連なる姪浜の石橋、

早船の縁戚両家がある。昭陽先生もこの両家には遠慮なく借金した。唐人町大火の跡に建てた家も翌年又々火災に遭う。さすがの昭陽も城下に住むのをあきらめ百道新地に移る決心をするのである。火災保険などない時代、よくぞ相次いで住家や塾舎の再建ができたものと感心する。今宿亀井家、幸いに少梁夫君の医業も繁昌、これも増築を重ねて診療と薬室、書斎と塾舎を整備している。このほか大支援者は生月島の捕鯨業益富家。そのため亀井塾は鯨肉が絶えず、書生たちにも栄養満点が定評されたと思われる。終わりになつたが今回の企画展に、福岡市の共催、県の後援、これに芸術文化振興基金による助成金交付を得たことを感謝を併せて特記する。

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
休館日 毎週月曜
(月曜日が祝日の場合は次の日)
12月29日~1月2日
入館料 大人300円・中高生200円
交通 姪浜 能古行渡船場→
フェリー(10分)→能古
(徒歩5分)→博物館
〒819 福岡市西区能古522-2
☎(092) 883-2881・2887
FAX (092) 883-2881